

私と現代ギリシャ文学

中井久夫

私は、たまたま高等学校において、古代ギリシャ文学を愛する教師に勧められ、当時ようやく出版された独習書を使って古代ギリシャ語を勉強しようとした。哲学よりも詩を好み、ギリシャ詞華集の一部を暗誦しようとした。

この勉強は、京都大学法学部に入学してからも継続した。私は、そのまま行けば、ひそかにギリシャ文学を読む会社員か公務員になっていたであろう。

しかし、私は結核になった。当時、結核の経歴があるということは卒業しても失業を意味した〔リッツォスの青春期と似た状況である〕。治癒後、私は、独立して生きる可能性が高い医師になろうと思い、医学部に転入学した。私はギリシャ語・ギリシャ文学から遠ざかった。最初は、ウィルス学研究者、1966年（32歳）からは精神科医としていそがしく働いた。

ウィルス学研究者時代、アテネのバストゥール研究所の論文のギリシャ語が何とかわかるので、同僚に読んでやった記憶がある。また、関本至先生の、日本最初の現代ギリシャ語文法を購入し、Teach Yourself Modern Greekで勉強しようとしたがやり通せなかった。セフェリスがノーベル賞を受賞したことは記憶にあり、現代ギリシャにすぐれた詩人がいることは知っていた。いくつかの英訳を購入しているが、それ以上にでなかった。

1984年10月、私は、若い同僚の結婚式で祝婚歌を読もうとして、よい詩を求めて私の本棚を探し、エリティスの、エドモンド・キーリーによる英訳詩集（ペンギン）に出会った。巻頭の「エーゲ海」は、彼が友人の婚礼の際に作った祝婚歌にちがいない。すらすらと日本語になった。私が神戸に住み、多島海に面して、ヨットに乗る機会が多かったからであるが、非常によくイメージできた。

これが契機であった。私は突然、現代ギリシャ詩にひきつけられた。本棚のThe Penguin Book of Greek Verseを開いて、最後の何ページかの現代ギリシャ詩の部分を見た。

カヴァフィスの「野蛮人を待つ」が真先に眼にとまった。この対話詩は、

私の中に、かつて青年時代に聞いて感銘した、芥川比呂志と宮口精二との、ラシーヌの悲劇『ブリタニキユス』（三島由紀夫）における、すばらしいやりとりの記憶を呼び覚ました。私には、この二俳優が、「野蛮人を待つ」を演じているのが、ほとんど実際に聞こえるようであった。私は、それを書き取っていった。

私は、現代ギリシャの詩が、長い間の渇きを満たすであろうことを予感した。私は、何人かの内外の詩人に高校生のころ親しんだが、「私の詩人」のリストはその後久しく増えていなかった。

神戸のギリシャ人土産物店の主人に本の入手を依頼してみたが、残念ながら文学は何も知らなかった（ただカヴァフィスの名は知っていた）。たまたま、哲学者の東大教授・坂部恵（さかべ・めぐむ）氏が東京のギリシャ物産展示場で現代ギリシャの本を販売していることを発見して教えてくださった。以来、私は出品しているハルソネス書房から現代ギリシャの本を入手することができるようになった。

しかし、現代ギリシャ語は難しい。英訳、独訳、仏訳を入手し、精神科医の推理力を生かして、語学力の不足を補おうとした。また、詩人が好んだ詩人の詩を考え合わせるようにした。さらに、詩朗読のテープをできるだけ入手して、詩人の声あるいは俳優の朗読を聞くことに努めた。1984年から85年にかけての私は、いささかクレージーであった。おそらく、私の言語意識が、精神科医として、「憂鬱 melancholy」「分裂 splitting, schizophrenia」「解体 disintegration」「葛藤 conflict」などの言葉ばかりを使うのに疲れて、「海」や「空」や「花」という言葉を使ってみたくなっただけであろう。言語意識のみずからに対する反乱であった。最初、エリティスにもっともひかれたのには、その四大（four elements）に向かって開かれたみずみずしい感覚性による。

結局、私は1985年春、小さな私家版の現代ギリシャ訳詩集を作って知人に配付した。カヴァフィスのしたことに倣うという気持ちがあった。

その夏、有名な文学者・大岡昇平氏が、私の私家版を入手されて、エッセイ集『成城だよりⅢ』で、「野蛮人を待つ」と「単調」とをたいへん高い評価を以って紹介され「私の好きな詩人が一人増えた」と書かれた。また、みすず書房の編集長・小尾俊人（おび・としと）氏が、出版しようといわれた。ためらう私に、小尾氏は「日本語（のよさ）で勝負しよう」といわれた。私は、20年来、精神医学書の翻訳者として、よい西欧精神医学邦訳書の出版元であるみすず書房とは長年の付き合いがあり、多少、私の日本語を評価しておられたのであろう。この書店から本を出すのはなかなか得られない名誉で

ある。私は感謝とともに承諾した。

『現代ギリシャ詩選』は1985年秋出版された。エリティスは、翻訳とともにコラージュの使用を許可してくれ、それがジャケットを飾った。私はまず、装丁の美しさに満足した。書評は好意的であったし、何よりも読者から反響があった。

1988年、同じみずず書房から『カヴァフィス全詩集』を出すのだが、それまで、私は、4年をかけて翻訳を再吟味し、二つの英訳（Dalven と Keeley and Sheppard）、おのおの一つの独訳（von den Steinen）と仏訳（Yourcenar）、百編前後で中止された池沢夏樹氏による日本語訳（『現代詩手帖』に連載されたもので、たいいてい図書館では断裁されていたが神戸大学教養部図書館にあった）と照合した。また、私は、自分の部屋の家具の配置をカヴァフィスの書齋の雰囲気近づけた。私の年齢が、彼がもっとも優れた詩を書いていた50歳前後であったことも、訳者の一つの好条件であると思った。その部屋の中で、私は自分の訳をテープに入れて、繰り返し聞いた。これを一年以上断続的に続けて、読むに耐える（readableな）日本語の詩としての完成度をできるだけ高めようとした。私は、日本語の特徴を活かして、部分的に脚韻を踏み、頭韻（alliteration）を活用し、modulation や rapid transition を行った。

すでに1985年の詞華集の序文に述べたことであるが、現代ギリシャ語と日本語とは、言語としては大いに異なるけれども、詩人が直面する問題には共通点がある。

何よりもまず、日本語には、イ・カサレヴウサに当たる「文語」とイ・ジモチキに当たる「口語」とがある。この点を利用することは西欧語ではできない。また、現代ギリシャ語が、フランス語とは大いに異なり、整備されていない言語であることも、日本語と似ている。それは、典雅ではないかもしれないが、生命力にあふれているということができよう。現代日本語は詩の言葉でないとして絶望する詩人もいるが、カヴァフィスも、似た現代ギリシャ語への絶望から出発している。共に巨大な過去数千年の遺産を背負って、時にそれを重荷に感じつつ現代に生きようとしている文化であり言語である。（日本の場合には中国古典も自国の古典に加わるので、古代ギリシャ・ローマ文化と同じ重さになると私は思う）

また、詩語としての日本語の問題に、その単調さがあると多くの人はいう。フォネームの数がすくなく、中間母音がなく、基本的に五母音で、語尾はすべて母音かnで終わる。ところが、現代ギリシャ語も基本的には五母音で、

フォネームは日本語よりやや多いが、英語に比べると非常に少なく、語尾は母音の他は n, r, s で終わるしかない。また、日本語の抽象名詞は多音節語でフランス語のようにきりっとしていないが、現代ギリシャ語の抽象名詞も音節が多い。詩語として、現代ギリシャの詩人が現代ギリシャ語を駆使する時と、日本の詩人が日本語を使おうとする時とを考えると、彼らが直面する困難に共通性があるのではないか。

実際、ギリシャの現代詩は、一行十五シラブルが普通であり、しばしば一行二十数シラブルの時がある。こういう一行の長さは、私の知る限り、他の言語では日本語以外にはない（日本語と文法の似ている朝鮮語は考慮されようが）。私は『狂ったザクロの木』を読んで、まず、日本語と同じ困難を克服してできた詩だと感じた。

自由詩における改行の意味はどういうことであろうか？ 散文詩とどこが違うのであろうか。これには、十分な説明を聞いたことがない。私はこう考えている。読む速度を implicit に規定しているのであろう、と。長い行は速い速度で、短い行はゆっくりした速度で読むように、という指示を下しているのである。散文詩とは、ほぼ同じ速度で読まれる詩である。音韻的には、散文とはそういうものであるというのが、私だけの定義である。同じエリティスの詩でも「狂ったザクロの木」は「エーゲ海」よりも速い速度で読まれるのが自然だと私は思い、私の翻訳では、そのように訳してある。一般に、現代日本詩の朗読は、間違っていると私は思う。現代ギリシャ詩の朗読のように、もっと速い速度で、過度の抑揚を付けずに、ほとんど散文的に、しかし行の長さによって速度を変えるか、行間休止時間を変え、頭韻や脚韻に注意して読まれるべきである。そうすれば、日本語においても、母音と母音、子音と子音の響き合いによる美しさが現れるはずである。

ついでに言えば、私にとって、詩とは言語の徴候的使用であり、散文とは図式的使用である。詩語は、ひびきあい、きらめきを交わす予感と余韻とに満ちていなければならない。私がエリティスやカヴァフィスを読み進む時、未熟な言語能力ゆえに時間を要する。その間に、私の予感的な言語意識は次の行を予想する。この予想が外れても、そこには「快い意外さ」la bonne surprise がある。詩を読む快樂とは、このような時間性の中でひとときを過ごすことであると私は思う。

私は、私が聴きえた限りでの、現代ギリシャ詩の美しさ、リズム、感興（インスピレーション）を日本語に移そうということを第一の目的とした。1989年春、『カヴァフィス全詩集』は、第41回読売文学賞の研究翻訳賞を受賞した。選考委員たちは、英訳でカヴァフィスを読んでいる人ばかりである

から、日本語の詩としてのカヴァフィスが評価されたのであろうが、むろん、カヴァフィスの偉大さが日本語をとおして日本人に評価されたということである。刊行以来4か月で受賞が決まった時、既に限定1500部はすべて売り切れており、私のところに直接売ってくれという人さえいた。これは詩集としては驚くべきことであった。詩集の再版は日本でも少ない事件である。

もっとも、初版が限定版とされたために、しばらく再販しないのが紳士的であった。1991年に普及版が出る前に、私はもう一度原典と各国語訳にあたった。この普及版が出てからの新しい現象は、大衆雑誌に引用や書評がのるようになったことである。『メンズ・ノンノ』という男性服飾雑誌(1991年7月号)がカヴァフィス詩の一部を掲載し、『Hanako』という雑誌の東京版(1991年8月12日号)が推薦図書に『カヴァフィス全詩集』を挙げた。現代人に読むに耐える愛の詩は多くないのであろう。

私はカヴァフィスについてリッツォスの詩を訳した。私は、かつてこの詩人の受難と世界的な釈放運動を聞いたことがある。この詩集も1985年から訳しはじめたものである。同時に『証言』のかなりの部分を訳してあるが、これは未刊である。

彼の長い詩は、日本語に訳して、読者を退屈させないようにすることは私には不可能だと思うが、彼の短い詩は、同じく短い詩を好み、身の事や風景に託しておのれ思想・感情を表現する傾向の強い現代の日本詩人の全般的傾向にもっとも接近したものだと思う。日本語にもっとも馴染みやすい詩である。コミュニストだというのが、むしろ私は、ギリシャ正教的なものを感じる。アイコンや教会が登場するが、筆跡からもそれを感じる。ロシアの影響は、詩人よりもメイエルホリドやエイゼンシュテインという、演出家、映画監督の理論であると思う。モンタージュ、ナラタージュ、フラッシュバックなどの技法が彼の詩には至るところに見られると私は思う。ギリシャ本国ではどうみられているであろうか。

1985年に刊行した『現代ギリシャ詩選』は詞華集である。五人の詩人を同じ音調、同じリズム、同じイメージ、同じ言語の硬さ(くだけかた)の水準で訳してはならない。この訳しわけは、半分は、原詩のリズムとイメージとによって自然に達成された。残り半分は意識的努力によるものであって、そのために、まず、それぞれの詩人が模範とした詩人、たとえばエリティスにおけるエリュアール、セフェリスにおける俳諧あるいはエリオットの詩を念頭に置いた。そのようなことを念頭に置いて読んでゆくうちに、必

ずしもそうではないこと、たとえばセフェリスの初期の詩には、むしろ、フランスの高踏派（Parnassien）から象徴派（symboliste）の影響があり、エリティスには同じ地中海詩人のヴァレリーの影響があるのではないかということに気づいた。「狂ったザクロの木」は知性の象徴としてザクロを使ったヴァレリーの「ザクロ」（1922）を踏まえた一種のパロディーであるに違いない。よしんばエリティスが意識していなくても、西欧の教養人ならばヴァレリーのこの有名な詩を連想せずにはいられないであろう。

次に、日本の詩人で、それぞれの現代ギリシャ詩人にもっとも近いのは誰かを考えて、それに近づけようとした。しかし、一対一の対応ではなく、たとえばエリティスは三好達治と中原中もとを共に明るく硬質にしたらどうか、カヴァフィスの文語詩には萩原朔太郎の文語詩が参考になるのではないかと模索した。

最後に、政治的、歴史的背景を考えに入れた。カヴァフィスは、フォースターによりストイックな詩人とされ、ロレンス・ダレルによりデカダンな詩人とされて、西欧では、それがステロタイプとなっている。しかし、セフェリスが指摘しているように、現代ギリシャ史にきわめて敏感な詩人という面がある。これは、西欧人には無視されている。

しかし、現代日本人には理解し共感できる。英国とフランス、他方では中国という大きな勢力の中で動いた極東の近代史は、「中国」を「トルコ」と置き換えれば、近代の東地中海史と非常によく似ている。日本は、最初、エジプトのモハメッド・アリのようにフランスによって近代化を行おうとした。1883年の英国艦隊によるアレクサンドリア砲撃は、1863年の英国艦隊の鹿兒島砲撃、英仏米蘭四国による下関砲撃と照応する。日本は英国側について近代化をなすとげるが、エジプトは没落する。伝記にみるとおり、カヴァフィスという現象が現れるためには、この砲撃事件がなくてはならなかった。カヴァフィスが政治情勢に敏感であったのもふしぎではない。『カヴァフィス全詩集』の注釈では、照応すると思われるギリシャ現代史上の事実をも挙げた。この点が、西欧のいろいろなカヴァフィス詩集の注と異なっている。

リッツォス詩の訳では、戦中戦後の日本人の苦難を念頭に置いた。それは私が生きた時代の体験であった。解説には現代ギリシャ史をかなりくわしく述べようとした。エリティスの『アルバニア戦線にたおれた一少尉のための悲歌』の翻訳には、私自身の戦争体験たとえば機銃掃射を受けた体験が役に立った。あの詩の前半には、私のもっともすばらしいと思う詩句があり、最初の章の翻訳は私がひそかに誇る部分である。ただ、エリティスの詩は、超現実主義の影響やギリシャの伝統的習慣のためにどうしてもわからない部分

がある。

私の憶測では、現代ギリシヤは西欧の一部であると同時に、文化的には地中海世界に属する。ヴァレリーやカミュと共通であり、ひょっとすると現代レバノンのマロン派キリスト教詩人ハーリール・シブラーン（精神科医・神谷美恵子によるよい日本語訳がある）に共通であるが、ドイツや北欧文学とは明らかに異質な要素があると私は思う。さらに、近代ギリシヤはバルカンだけでなく、東地中海世界の政治力学の場の中にある。文化的な相互作用もあるかもしれない。このような多重性と緊張性とは、古代ギリシヤ詩と相違する、現代ギリシヤ文学の魅力の基礎をなしている。

カヴァフィスの各国語への翻訳をみると、第一級の文学者が、直接は訳さないまでも、いかに翻訳を推進しようと努めたかがわかる。第一級の文学にも、翻訳家を非常に熱中させる文学とそうでない文学とがある。カヴァフィスは前者の中でも最たるものであって、私のような一精神科医さえも熱中させる力があり、そしてそれは読者に伝染しうるものであったといえるだろう。

〔この小文は、広島大学文学部言語学科大学院の高橋りえこさんのもとめによって、ギリシヤの現代ギリシヤ文学翻訳状況調査に協力するために書いたものであり、ギリシヤ語への翻訳を予想したために日本文のまま活字にするのはいささか気はづかしいけれども、書き直すゆとりがないので読者には何とぞ御海容下さるよう——〕